

侵略神社跡地調査・巨文島・大田・仁川

辻子 実

はじめに

朝鮮半島においては1945年8月15日以降8日間で、136社にのぼる社殿・奉安殿などに対する破壊・放火⁽¹⁾などが伝えられているように、韓国で現存する社殿は、知られている限りでは鉄筋コンクリート造の小鹿島更生園神社のみである。また、朝鮮戦争及び朴正熙大統領時代（在任：1963年～1979年）の日帝残滓破壊によって、現在、侵略神社関連の木造建造物も、残っていないと考えられる。今回の調査においても、木造建造物を見出すことは出来なかった。

そのため調査のポイントは、神社関連石造遺物になる。

玉垣・石積・灯籠・階段などの石造物は残置されていたり、例え転用されたりしていたとしても特有な形状をしているため認識可能で、跡地特定に有効である。侵略神社跡地の調査に関しては、台湾神宮跡地調査の定規筋確認過程でも明らかなことであるが、神社建築に関する一定の知識が必要とされる。

① 玉垣

玉垣は、親柱、子柱、笠石、地覆石で構成されている。韓国においても、公園などで石造垣

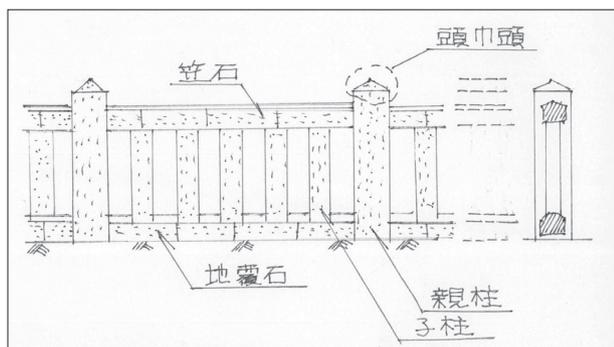


図1 玉垣各部名称

根が確認できるが、神社建築に伴う玉垣の多くの親柱は、神道墓石・軍人墓石などによく見られる頂上部を四角錐に絞った通称・頭巾頭（トキンあたま・四角錐）になっており、子柱には寄進者名を刻銘したものが多く、笠石も独特の形状を有していることから、転用されていたとしても特定できる。

② 石積擁壁

石積擁壁工法としては、布積・谷積工法などが一般的に知られているが、韓国の石積工法は一般的に布積であり、谷積工法で施工されたものは日帝時代のものと、ほぼ考えて良い。特に、寺の屋根の様に、上にいくほど急にそり上がる勾配を持つ「寺勾配」工法は、日帝時代のものである。

③ 灯籠

中国式・韓国式の灯籠もあるが、神社形式の灯籠は、独特の形状を有しており特定しやすい。

④ 階段

多くの神社跡地で、残置されている。戦前の写真や形状、また尺貫法で築造されているため特定しやすい。

⑤ こま犬

日本のこま犬は、左右のこま犬が阿吽形式で

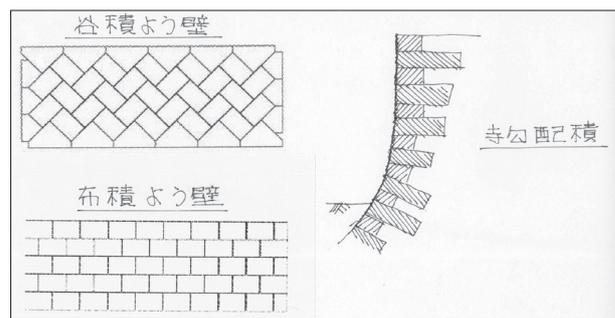


図2 石積擁壁工法

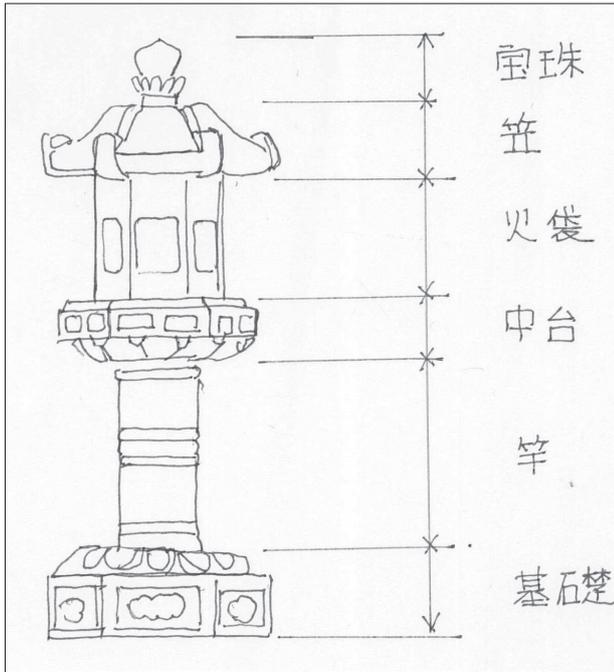


図3 灯籠各部名称

作成されているため特定できる⁽²⁾。

神社の名称については、神社規則などによって、「○○神社」と明確に特定される場合と、「神明神祠」(祭神・天照大神)や「神祠」⁽³⁾のように単に神祠と称される場合があるが、今回は、(巨文島)神祠を「(巨文島)三嶋神社」と、地名を付記すると共に通称名を採用した。

(巨文島)三嶋神社

(全羅南道麗水市三山面巨文里)

祭神、金比羅神、恵比寿神。社格、神祠。



写真1 三嶋神社跡全景

韓国の南端、麗水(ヨス)のフェリー乗り場から、高速フェリーで約2時間、巨文島(コムンド)に到着する。

フェリーを降りると目の前の小高い丘の上に、侵略神社跡地として整然とした玉垣があり、地元住民に確認するまでもなく、三嶋神社跡地であることが認識できる景観である。

巨文島の歴史は、韓国においても特異な歴史を有している。

① 軍事的位置

1885年4月、第2の香港を目指すイギリス海軍の3隻の軍艦によって占領され、1885年から1887年の2年間、イギリス海軍基地が設置されるという巨文島事件が発生している。これは、イギリスがロシアの伸張の機先を制するためのものだったといわれている。イギリスは清国と日本に巨文島の占拠を通告し、住民を動員して兵舎や防御施設を建て、また上海との間に電信線まで敷設している。



写真2 イギリス軍が敷設した電信線跡



写真3 日本軍が構築した巨文島・防空壕入り口

島にはこの時代のイギリス人水兵と海兵が埋葬されているが、墓地は、2012年に開催されたEXPO麗水・世界博覧会関連事業で、観光地として整備され、公園化されている。

日帝時代には日本海軍が駐屯すると共に、近年、日帝時代に造られた防空壕が多く確認されている。巨文島に構築された防空壕は、後述する仁川神社隣接地に構築された岩盤がむき出しのままの防空壕(写真26)と比較しても、コンクリートで被覆補強され軍事施設としての防空壕であることが一目瞭然である⁽⁴⁾。

港の一部は、現在も韓国海軍基地として機能している。

② 日本人街⁽⁵⁾

1930年代の街並みが残っている⁽⁶⁾。20世紀初頭、巨文島には山口県の網元が移住して大きな経済的成功を収めた。水産加工、鉄工・造船、娯楽、宿泊、公共施設などを設けて集落を形成し、巨文島は東シナ海における重要な漁業基地となっていった。1942年の調査によると、古島(巨文里)には内地人78戸(309人)・朝鮮人223戸(1092人)の計301戸(1401人)が居住していた⁽⁷⁾。

旧日本人街は、家屋群が残されており、民宿として営業している元料亭もある。ここでは、床の間や欄間など往時の姿を確認できる。

三嶋神社は1905年頃⁽⁸⁾には、三嶋神社の前身となる「金比羅宮」の小祠が造られ、その後、「恵比寿神」を祀る小祠も造られていたようである⁽⁹⁾。

1940年の紀元二千六百年キャンペーンは巨文島にも及び、三嶋神社の増改築が行われ、1941年10月10日に神祠として設立認可されている⁽¹¹⁾。

朝鮮半島における神祠の多くは、侵略神社行政によって天照大神の遥拝所である「神明神祠」として設立されているが、巨文島神祠のように、認可前に海神である金比羅神・恵比寿神が祀られていたことや、天照大神以外の祭神を祀っていたことから、単に「神祠」として設立認可されている。

ただ、地元では、三嶋神社と呼ばれていたようである。これは、巨文島が、古島、東島、西島の3つの

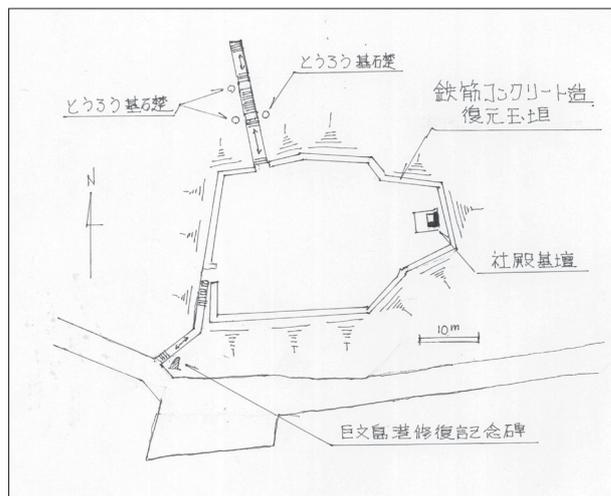


図4 三嶋神社跡地概念図



写真4 三嶋神社参道階段および灯籠基礎



写真5 三嶋神社灯籠基礎

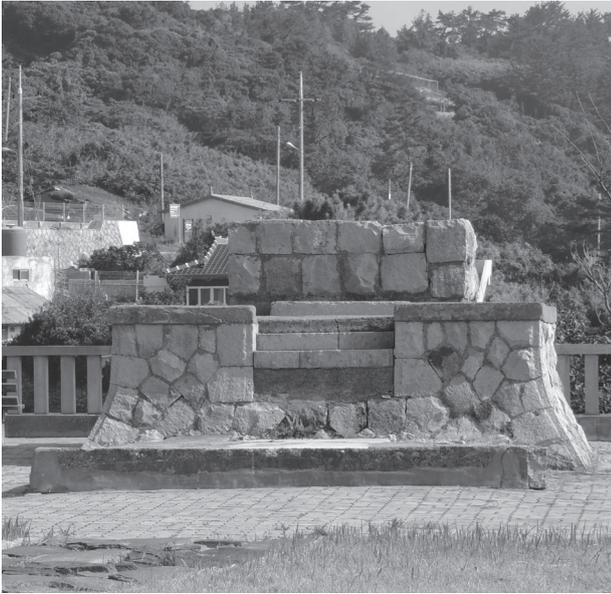


写真6 三嶋神社社殿基壇跡

島からなっていて、三島とも呼ばれていたことと、三嶋大社⁽¹²⁾の祭神である事代主神を、俗に恵比寿と称したことからの通称と考えられる。

神社跡地は1945年以降、一時ヘリポートとして利用されていたこともあったようであるが、現在は、ハミルトン公園として整備されている（名称は、巨文島事件当時の海軍事務長官 W.A.B. ハミルトン大佐 (W. A. B. Hamilton) にちなんでいる）。木造構造物は皆無であったが、社殿基壇・階段・灯籠などが確認でき、1940年代の改修時を認識できる。

社殿基壇部の石積は、谷積・寺勾配積、正面に階段を配置する典型的な社殿構造である。基壇上部の布積部分は、朴正熙大統領時代に造られた「革命改建碑」の基礎である。

三嶋神社跡地では、驚愕的な事実に出合った。



写真7 石造玉垣ではあり得ない形状で復元された玉垣親柱

玉垣が全て、鉄筋コンクリートで、ほぼ正確な形状で復元されているのである。

侵略神社跡地では、台湾・桃園神社（現・桃園県忠烈祠）が修復されていたり、台湾・佳冬神社の狛犬が移設されていて、欠損した尾の部分がコンクリートで修復されていたりしている事例は実見しているが、朝鮮半島では意図的に神社施設が破壊されている。

玉垣石材については、仁川神社跡地（写真22）で残置されていたり、土留めなどで転用されている事例（京城神社。現・崇義学園）はあるが、神社施設の一部とはいえ他の侵略神社でこれに類する「復元」例はないであろう。

新旧の図面あるいは、写真による比較検討が出来ないので、どこまで正確に復元しているか検証できていないが、少なくとも親柱の頭巾頭の形状は、日帝時代の形状を基に復元したことを示している。

神社の下には1938年に竣工している「巨文島港修築記念碑」が、一部、刻字が削除はされているものの、修築されている。

また、神社ではないが小学校に造られた「奉安殿」の位置も、谷積擁壁が残されているため、容易に位



写真8 巨文島港修築記念碑（左右ともに）



写真9 巨文島小学校。谷積擁壁前に「奉安殿」が建てられていた

置が確定できた。⁽¹³⁾

EXPO 麗水・世界博覧会関連事業でイギリス人墓地の整備など巨文島も観光施設の整備・拡充が行われているが、玉垣復元や巨文島港修築記念碑修築などは、観光施設整備としても巨文島独特の対日感があるのではないだろうか。

大田神社 (大田広域市中心区大興洞)

祭神、天照大神、明治天皇、昭憲皇太后。社格、道供進社。⁽¹⁴⁾

1907年4月、蘇堤山の上に社殿を建て「大神宮」⁽¹⁵⁾として鎮座(1911年11月鎮座説もあり)⁽¹⁶⁾。1917年6月11日「大田神社」と名称が改められ、創立。1928年昭和天皇の即位大典を記念して遷座。1936年道供進社に指定。

大田神社の位置については現・聖母女子高校説が有力であるが、今回の調査では、鳥居が切断された跡と考えられる遺物(直径≒30cm)が、カトリック医大大田聖母病院入り口で現認でき、谷積擁壁も病院敷地内で現認できたことから、聖母女子高校敷地

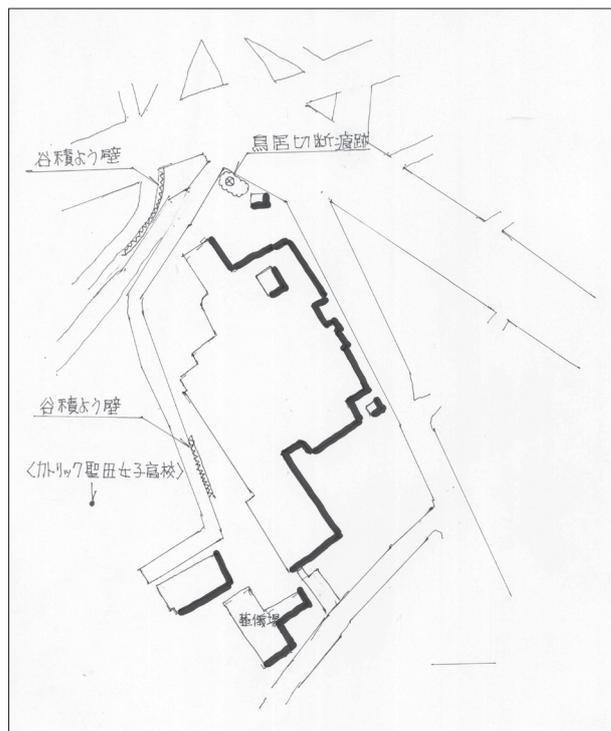


図5 大田神社跡地概念図

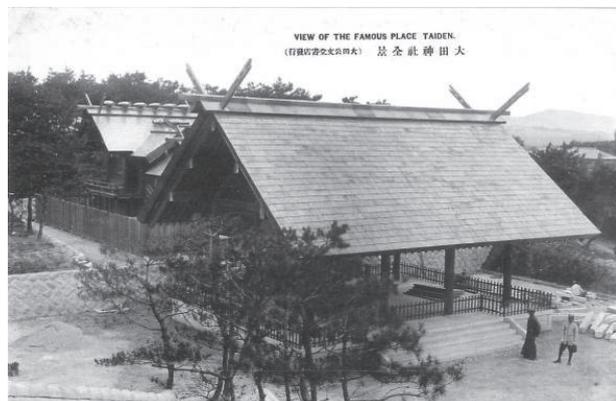


写真10 大田神社1(絵葉書) 谷積擁壁が写っている



写真11 大田神社2(絵葉書) 遷座時の景観と思われる



写真12 大田神社鳥居の遺物



写真13 大田神社谷積擁壁

は、1928年の社殿移設前鎮座地であったものと推測される。隣接しているカトリック医大大田聖母病院が「新たに現社地に社殿を造営して遷座した」⁽¹⁷⁾大田神社跡地ではないかと考えられる。

仁川神社 (仁川広域市中区新生祠)

祭神、天照大神、明治天皇。社格、道供進社⁽¹⁸⁾。

仁川神社は仁川港を望む地に創建されている。仁川港は日露戦争において、旅順港への奇襲と並行して行われ、日露戦争の口火を切った仁川沖海戦として知られているように、当時から戦略上でも重要な港湾であった。

1890年10月28日、日本公園内仁川大神宮に皇大神宮⁽¹⁹⁾(天照大神)を鎮座。1916年4月、仁川神社に改称、24日に創立。1922年10月、明治天皇を合祀。1936年8月、道供進社に指定。

なお、「仁川神社参拝記念絵葉書・皇紀二千六百年・御鎮座五十周年」(1940)に付されている「仁川神社御由来略記」⁽²⁰⁾によると、

1. 御祭神；天照皇大神・明治天皇
2. 御例祭日；10月10日、11日、12日
3. 御由緒略(西暦；筆者加筆。旧漢字を新漢字に変換)

明治十六(1883)年仁川開港後在留邦人の増加するや、内忠君愛国の至誠を涵養し、外帝国の国威を海外に発揚せんことを期し特に天祖天照皇大神の神霊を奉斎せんとする帝国在留民の懇願切なるものありたるにより、明治二十三(1890)年時の仁川領事林権助は京城公使館並に外務省を経て三重県知事と往復交渉の結果、仁川大神宮御創立に関する神霊拝載方を神宮司庁に稟請す、此の儀神宮司庁当局並に内務省に於ては皇大神宮の神霊を海外に鎮斎せしこと未だ前例を見ざるの理由を以て事容易に許容相成らさるところなりしも、時の神宮祭主久邇宮朝彦親王殿下の特別の御詮議を蒙り、御神霊拝載方御聴許の御沙汰を賜る、茲に領事館員佐野誠之迎接員として出向し、御神霊並に御染筆の御神号を奉戴し、三重県警察官警護の許に大阪に至り、執賀丸に奉安して同(1890)年十月二十七日海路仁川港に御上陸、一時領事館に奉安し、同月三十日日本公園内造営の神殿に鎮斎し奉る之れ仁川神社の濫觴にして、皇大神宮の神霊を

公式の手續を以て朝鮮半島に奉戴したる嚆矢たるのみならず、将又広く我か海外に於て鎮斎し奉りたる第一発祥なり、爾来仁川大神宮と称号し奉り、大正四(1915)年に及ぶ、其の間明治四十一(1908)年には御神幸祭設定して今日の仁川祭の段振を作り、大正四(1915)年現社殿に改築す、同五(1916)年に至り神社規則の発令に伴ひ御社号を仁川神社と改め、同十一(1922)年十月明治天皇を合祀奉斎して祭神を二座に改む、昭和三(1928)年御大典記念事業を以て境内地の整備補修並に社殿の修営を行ひ、同六(1931)年には伊勢皇大神宮より五種の御神寶御献進の儀あり、同十一(1936)年に至り神社制度の確立に伴ひ、将来官国幣社に列格を仰ぐべき工作の第一歩として、経費三万九千円を以て社務所斎館を新築し、同(1936)年八月道供進社として指定せられ、年中三大祭には道知事幣帛供進使として参向せらるゝに至る更に皇紀二千六百(1940)年、御鎮座五十周年記念事業として、境内地の模様替、社殿の造営、外



写真 14 仁川港日本公園仁川大神宮(絵葉書)1915年改築、1916年改称前



写真 15 仁川神社(絵葉書)1940年鎮座50周年当時



図6 仁川神社跡地概念図



写真17 仁川神社第2鳥居（絵葉書）



写真18 校内に残る仁川神社注連石遺物

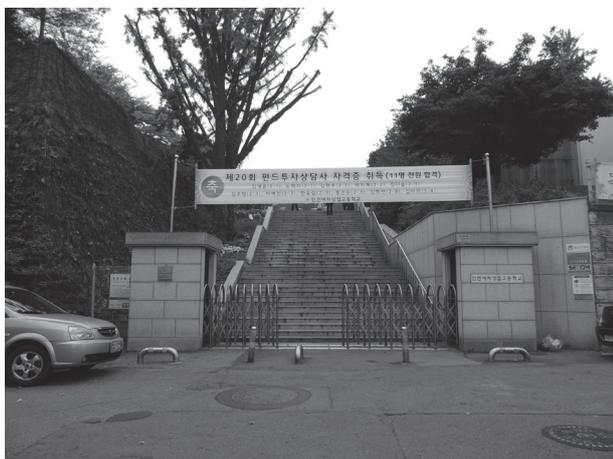


写真16 学校正面階段・谷積擁壁

苑の構築等、総工費五十万円を予想のもとに其の企画を進められたるも、今次事変のため之れを四分して四期に区分し目下仁川府に於ける精勤聯盟の奉仕作業と合致して第一期工事に着手中なり。

仁川神社跡地は、現在、仁川女子商業高校になっている。

韓国の侵略神社跡地において、仁川女子商業高校ほど遺物が存置されている神社跡も珍しい。

① 階段・石積擁壁；学校正面階段の右側の擁壁は、校舎建築のため改修されているが、左側の谷積擁壁は、石積工法などから考察して、神社遺物であ



写真19 仁川神社灯籠遺物

る。階段踏板石材に関しては、残置もしくは転用材と考えられるが改修されているため、遺物として特定することは出来なかった。

② 注連石（しめいし）；特記すべき遺物として、「注連石」独立円型柱2本が残置していることが挙げられる。注連石は別名、注連柱・注連縄柱・注連掛け柱・注連掛け鳥居などと呼ばれ、呼び名のごとく注連縄を張り渡す柱のことで、戦前の仁川神社絵葉書には注連石独立角型柱が写っており、キャプションには「第2鳥居」と記されている。残置されている注連石は独立丸型柱なので第2鳥居ではないが、柱間の距離から考察すると、より社殿に近い位置に建てられていた可能性が高い。

③ 灯籠；1944年2月に寄進された1基がほぼ完全な形で残置している。灯籠の火袋部分の鹿のデザインは、靖国神社参道に列柱している灯籠のものと



写真20 仁川神社灯籠遺物・火袋部



写真22 校内の片隅に放置されている玉垣石材



写真23 「開港記念」碑文



写真21 仁川神社玉垣および石積擁壁1



写真24 仁川神社玉垣および石積擁壁2



写真25 玉垣小柱寄進者

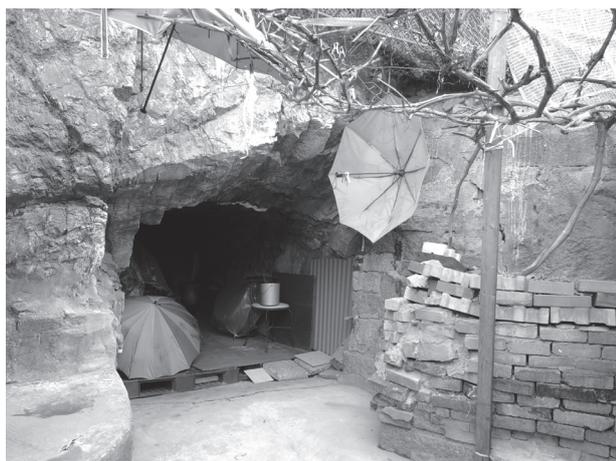


写真 26 仁川女子商業高校隣接防空壕入り口（上下ともに）

酷似。

④ 玉垣；一部分とはいえ谷積擁壁の天端に、玉垣が約 12m に渡って残置されている。

玉垣の小柱の寄進者名はモルタルで塗りつぶされているが、劣化しているため洗浄すれば復元可能な状態にある。

また、解体された玉垣の石材が、学校敷地の片隅に積まれている。

⑤ 碑文；神社境内に建てられていたと考えられる「(仁川港)開港記念」(部分)碑文。

⑥ 防空壕；神社境内地崖下に掘られた防空壕。一般的な防空壕なのか神社の神体を収納するための防空神庫を兼ねているものか、今回の調査では壕内調査を行っていないので確認出来ていない。⁽²¹⁾

(仁川・月尾島) 愛宕神社

(仁川広域市中央区月尾路)

祭神、愛宕神。⁽²²⁾ 社格、仁川神社、境外摂社（未確

認)。

愛宕神社跡では、遺物をまったく確認できなかったが、月尾島山頂に「愛宕神社」に関する説明板が、ハンゲル・英語・日本語で設置されていた。以下は、日本語説明文である。

神社とは日本人が神的な存在として仕える皇室の先祖に祭祀を捧げる施設である。日本は植民地として獲得したり租借したりした地域には例外なく神社を建ててこれを崇拝した。日本人が朝鮮に建てた神社は主に韓国の根になるところや韓国の精気が押しつづせる山頂上に建てられたが、月尾島も逸れることはできなかった。

1889年江南哲夫をはじめ仁川の日本居留民有力者14人の発起により着手された仁川大神宮は1897年6月17日建築工事が落成されることでその面貌が整えられた。ここには日本の守護の神様である天照大神が祀られた。仁川神社の境外寺である月尾島の愛宕神社は1908年に設立されて、1929年9月に一



写真 27 愛宕神社説明板



写真 28 愛宕神社神殿並びに拝殿の一部(絵葉書)1929年改築前の景観



写真 29 愛宕神社（絵葉書）1929年改築後の景観



写真 30 愛宕神社跡地の景観

回改築された。

火事を予防する愛宕神を仕える愛宕神社は京都の愛宕山にある愛宕神社が総本山という。月尾山の愛宕神社は独立以後に破壊され、奉安殿に上る階段だけは残っていたが、韓国戦争以後はそれさえ無くなった。愛宕神社の入り口には日清戦争の時に亡くなった日本軍を追悼する忠魂碑も建てられた。

神奈川大学の『海外神社（跡地）に関するデータベース』では、「愛宕神社は『終戦前の海外神社一覧』（佐藤弘毅編、『神道史大辞典』）に掲載されていないが、1928（昭和3）年の仁川府内図（朝鮮総督府作成『一万分一朝鮮地形図集成』1998年）には、月尾島山頂に確認ができる」と記載されている。

愛宕神社が、上記説明文にある「境外寺」の表現から仁川神社の境外摂社として鎮座されていたとすると「終戦前の海外神社一覧」に記載されていないことにも整合する。説明文には出典が記載されていないが記載内容が詳細であり、『仁川府史』（仁川

府、1933年）などに基づいて書かれたものであることが推定できる。

朝鮮神宮（ソウル特別市龍山区厚岩洞）

祭神、天照大神、明治天皇。社格、官幣大社。⁽²⁴⁾

日帝は、漢陽（ハニャン）都城の城郭を破壊して漢陽公園を建設（1910年）、その後、公園に朝鮮神宮を造営（1925年）している。

現在、朝鮮神宮跡地で唯一、現地に存置されていた第2鳥居前の石積部分を含む社殿跡一帯で、漢陽都城城郭遺跡発掘調査が行われている。

この発掘調査によって、2012年に実施された城郭

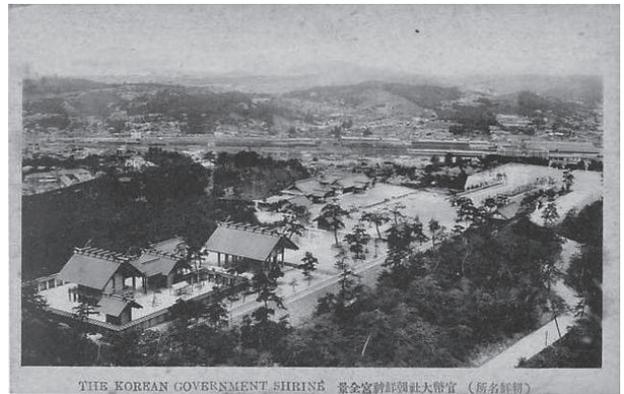


写真 31 朝鮮神宮全景

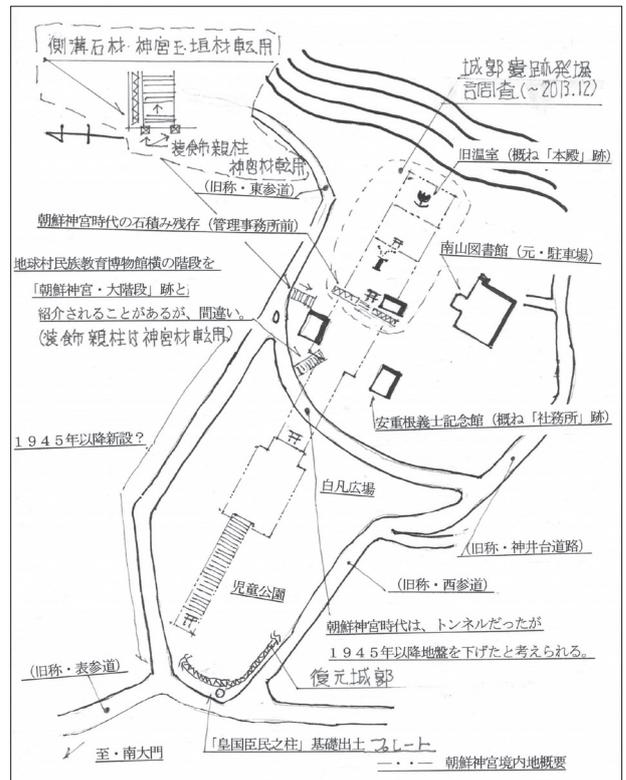


図 7 朝鮮神宮跡地概念図

復元のための白凡広場発掘調査時に出土した「皇国臣民之誓詞柱」(1939年竣工)基礎のように朝鮮神宮の鳥居・拝殿・本殿などの基礎が出土して、具体的な位置・規模が明らかになる可能性も大きいが、



写真 32 北側階段側溝部に玉垣笠石・子柱材が転用されている



写真 33 北側階段石積天端に玉垣笠石材が転用されている



写真 34 北側階段裝飾親柱として転用されている親柱材



写真 35 西側階段裝飾親柱として転用されている親柱材

従来、神宮の位置特定の基準になっていた石積の消失は不可避と考えられる。発掘調査報告書に期待したい。

朝鮮神宮大階段や玉垣などに使われていた膨大な石材の行方に関して、具体的な転用用途について言及されたことはなかった。

北側階段について、朝鮮神宮時代の階段ではないかとの説があり今回、石材調査を行った。

その結果、北側階段踏板部の石材に関しては、転用石材か否か確定出来なかったが、階段向かって左側側溝部に使用されている石材は、玉垣の笠石形状を有しており、明らかに玉垣石材の転用であることが判明した。小柱の転用については、朝鮮神宮が官幣大社であったことから寄進者名の刻銘がないため断言できないが、形状寸法から、これも、同所で転用されていると考えられる。

特に、現在も階段の裝飾親柱として使用されている石柱は、頭巾頭の形状から、朝鮮神宮の転用材であることは明らかである。ただし、頭巾頭の石柱に関しては、玉垣親柱のほか神宮参道大階段の裝飾親



写真 36 小鹿島更生園神社拝殿・社殿の現況

柱として使用されていたことが、当時の写真から判定できるので、いずれのものを転用したかについては不明である。

おわりに

侵略神社の跡地景観については、台湾においては、台湾神社跡地に敢えて圓山大飯店（圓山ホテル）が建てられ、他方では、侵略神社跡地としては異例のことであるが、桃園神社跡地が桃園県忠烈祠となり、往時のままに社殿などが修復され、台湾国家三級古蹟に指定されている例がある。

今回の調査でも、愛宕神社跡には「日本人が朝鮮に建てた神社は主に韓国の根になるところや韓国の精気が押しつぶせる山峰頂上に建てられ……」との表現が記され、朝鮮神宮「皇国臣民之誓詞柱」基礎出土地点ではプレートが設置されている一方、三嶋神社では玉垣が復元されている。

1923年に南大門駅から「京城（けいじょう）駅」に改称され、1925年に竣工したソウル駅舎の一部が、2011年、「文化の駅ソウル 284」という複合文化空間としてオープンしているが、旧駅舎の前には、朝鮮総督に任命された斎藤実に向けて爆弾を投げ、1920年11月29日、西大門刑務所で絞首刑が執行された独立運動家姜宇奎（カン・ウギユ、1855年～1920年）が、爆弾を投げる姿の銅像が建てられている。

東アジアにおける日帝残滓に対する感情は、複雑

である。

韓国内に唯一現存する社殿と考えられる「小鹿島更生園神社」社殿についても、存続論争が韓国国内で起きていることが伝えられている⁽²⁵⁾。

韓国全羅南道高興郡小鹿島に残っている「旧小鹿島更生園神社」（1936年5月13日鎮座。無社格。1935年6月造営説有。祭神、天照大神）は、2004年に登録文化財第71号に指定され、2008年に5000万ウォンの予算をかけて神社の建物の改装工事が行われているが、この事実に関して、いろいろな意見が出されているようである。民族問題研究所事務局長は、「小鹿島内の神社は、すでに本来の機能を失った。日帝侵略の痕跡の教材として保存する価値はある」と述べた。一方、檀国大学史学科の教授は、「神社は刑務所などの他の植民地時代施設とは違うので、多く税金を投入してまで保存するのは間違っている」と指摘している。

筆者は、「日帝侵略の痕跡の教材として保存する価値はある」という意見と同じ考えであるが、侵略神社跡地の景観変容の調査をし続けることが、日本人にとって意味するもの、神社参拝を強要されたアジアの人々にとって意味するものを、歴史的位置づけも含め多方面から分析する必要がある。

韓国における侵略神社の景観変容を知るためには、学校史・道市史などのほか、1945年以降各地で発行された新聞・雑誌などの検索も不可欠である。

特に、神祠・神明神祠に関しては境内規模が狭隘なため、跡地が公園・学校・教会など公共的用地になっていない場合もある上、文書・写真なども少なく、巨文島の三嶋神社などのように跡地が特定できるものは例外で、古老などへのヒアリングが不可欠になっている。

今回の調査報告書においても、今後の神社跡地調査の利便性を考慮して跡地概念図を作成したが、より正確な神社跡の調査を行うためには平板測量などの必要性が生じるであろう。

日韓共同研究は不可欠であり、共同研究の道を模索したい。

調査期日

(巨文島) 三嶋神社 (2013年11月2~3日)。大田

神社 (2013年11月5日)。仁川神社 (2013年11月6日)。(仁川・月尾島) 愛宕神社 (2013年11月6日) 朝鮮神宮 (2013年11月7日)。

【注】

- (1) 森田芳夫『朝鮮終戦の記録—米ソ両軍の進駐と日本人の引揚』(巖南堂・1964年) P187。
- (2) 韓国では、額の中央から一角をはやしている「ヘテ」と呼ばれる正邪を見分ける能力を持つ聖獣像がある。李朝時代は王宮正門の左右に石像が設置され (1894年)、守護神獣の役割を担っていた。中国獅子像は、日本国内で「こま犬」とされている例も多いが、左右の口とも阿形である。
- (3) 出典：中村均『韓国巨文島にっぽん村—海に浮かぶ共生の風景』「神祠に関する規定を定める件」1917年3月内秘第71号各道長官宛朝鮮政務総督通牒。
今般府令第二一号をもって神祠に関する規則を定められたる趣旨は地方住民の事情により一般神社の体裁を具備せる神社を創立難致場所に限り其の地方住民に敬神上満足をあたうる為特例を設けられたる義に付本令により神祠設立を出願するもの有之節は篤と実況を審議し現に其の土地に居住する者の力をもって神社を創立し之を維持することあたわずと認むるもの限り意見を付して進達しなお下記の点御留意相成度及内牒候也。
- (4) 巨文島で日本植民地時代の軍事施設発見 (韓国・聯合ニュース・2006年5月29日)
日本が太平洋戦争末期、全羅南道麗水市巨文島に塹壕 (ざんごう、戦場で、歩兵が敵弾を避けるために作る防衛施設) やトンネルなど大規模な軍事施設を構築していたことが分かった。これは日本が韓国に作った軍事施設の中で、済州道に続き2番目に大きな規模のものだ。28日、日帝強占下強制動員被害真相究明委員会 (委員長：チョン・ギホ) によると、日本は1944年12月から1945年6月まで日本人と巨文島の住民100人余、さらに北朝鮮の発破技術者らを強制動員し、巨文島の東島・西島・古島に全長15~25メートル、幅・高さ2.5~3メートル規模のトンネル12カ所、9メートルのT字型塹壕2カ所、長さ80メートルの石の防壁1カ所、地下通路などの軍事施設を作った。この施設は厚さ30センチメートルのコンクリートで頑丈に作られていた。東島で発見された9つのトンネルのうちの7つは海岸沿いに建てられており、船を停泊できる接岸施設も整えられていた。この施設は武器などの貯蔵や戦争時の偵察などのために作られたものと見られている。真相究明委員会のキム・ユンミ調査官は「巨文島は日本と中国、釜山と済州道を往来できる地理的要衝地である上に、漁獲量も多く、情報収集と共に物資の調達にも最適地」と分析した。しかし日本は間もなく敗戦し、巨文島の軍事施設を使用することはなかった。真相究明委員会はこの軍事施設の構築のために若者から老人までを強制動員し、労働を怠った者には食事を抜いたり暴行を加えたという住民の証言も入手した。現在、巨文島には日本式の建物や神社の跡など、日本植民地時代の残骸が各地に残っている。真相究明委員会は昨年9月から巨文島で真相調査を行っている。
- (5) 『『離れ島』の移住漁村：巨文島』布野修司・韓三建・朴重信・趙聖民著『韓国近代都市景観の形成—日本人移住漁村と鉄道町』(京都大学学術出版会・2010年6月8日) 所収。
- (6) 中村均『韓国巨文島にっぽん村—海に浮かぶ共生の風景』(中央公論社・1994年) P87には、1930年代の略図が掲載されている。
- (7) 前掲書 (6)・P122。
- (8) 前掲書 (5)・P251。
- (9) 前掲書 (6)・P88には1940年頃の巨文島 (略図) が掲載されているが、図では後の三嶋神社境内に、「金比羅宮」「恵比寿神」の祠が別々に建てられている様子が描きこまれている。
- (10) 1940年が神話上の初代天皇神武の即位から2600年に当たるとされたことから、日本政府は1935年に「紀元二千六百年祝典準備委員会」を発足させた。幻に終わった東京オリンピックも開催が予定されていた。各種記念行事は、国家神道色が前面に出され祇院が設置され、神武天皇を祭神とする檀原神宮の整備には全国の修学旅行生を含め121万人が勤労奉仕に駆り出された。侵略神社では、北京神社 (中国)、南洋神社 (パラオ)、建国神廟 (偽満州国) などがこの年に創建されている。2月11日の紀元節には全国11万もの神社において大祭が行われ、体育大会など様々な記念行事が朝鮮・台湾などを含む各地で催された。
- (11) 佐藤弘毅「戦前の海外神社一覧Ⅱ」『神社本庁教学研究所紀要』第3号1998年・P185。
- (12) 三嶋大社。静岡県三島市。
- (13) 崔吉城編『日本植民地と文化変容—韓国・巨文島—』(御茶の水書房・1994年)「写真でみる巨文島」に奉安殿の写真が掲載されている。
- (14) 岩下傳四郎編『大陸神社大観』(大陸神社連盟・1941年) P338「道」から奉幣を受け、「府供進社」は朝鮮総督府から奉幣を受ける社格で、府県社に相当。
- (15) 伊勢神宮の遥拝殿。
- (16) 前掲書 (11)・P168。他に1907年、東蘇提洞の主山 (大田駅の東側) に創建され、1929年移転説有。
- (17) 前掲書 (14)・P338。
- (18) 前掲書 (14)・P335。

- (19) 伊勢神宮の2つの正宮のうちの内宮の遥拝殿。
- (20) 辻子蔵。神奈川大学海外神社（跡地）に関するデータベースで公開。
- (21) 防空神庫に関しては、いろいろな形状があるが、防空壕型神庫としては台湾神宮の防空神庫について、津田良樹「台湾神社から台湾神宮へ」『年報非文字資料研究 第8号』（神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター・2012年3月20日）P20以下に詳しい。防空壕が、防空壕型神庫か否かの判断基準としては、壕内に神体を安置する棚の設置の有無が一つの基準となる。
- (22) 出典：愛宕神社説明板より。愛宕神（伊弉冉尊・埴山姫神・天熊人命・稚産霊神・豊受姫命）。京都府京都市右京区嵯峨愛宕町1。旧社格（府社）。
- (23) 山口公一「『韓国併合』以前における在朝日本人創建神社の性格について」（『日韓相互認識』日韓相互認識研究会・2009）所収、仁川府編『仁川府史』（仁川府・1933年）参照。
- (24) 前掲書（14）・P317。
- (25) 韓国人「韓国に唯一現存する日本の神社」—小鹿島更生園神社存廃論争（韓国・文化日報・2013年5月22日）

韓国の全羅南道小鹿島に、韓国で唯一現存すると言われている日本の神社「小鹿島更生園神社」。その存廃をめぐる議論を紹介。最近、日本の政治家らによる過去の歴史や慰安婦関連の妄言が相次いでいるが、全羅南道小鹿島に国内で唯一の原型を維持した日本の神社が登録文化財に指定され残っているという事実が発覚し、存続させるべきかどうかをめぐる議論が起きている。22日、文化財庁によると、韓国全羅南道高興郡小鹿島に残っている「旧小鹿島更生園神社」は、1935年に建立され、2004年に登録文化財第71号に指定された。日帝時代には国内に1000以上の神社が建てられたが、すべて撤去され、現在は小鹿島に位置するこの神社だけが唯一原型を維持している。神社は礼拝に使用される拜殿と神体が安置された本殿の2棟で構成されている。当時、朝鮮総督府によって全国各地から強制的に連行されたハンセン病患者への参拝を強要していた。文化財庁は「日帝の蛮行を記憶するためのもの」と言って社殿に加え、ハンセン病患者を監禁して管理した旧小鹿島更生園事務本館、講堂などを登録文化財に指定した。しかし、最近になって日本の政治家の妄言が続き、神社の保存について否定的な気運が高まってきている。特に、2008年に5000万ウォンの予算をかけて神社の建物の改装工事が行われた事実が知られ、11日には某ポータルサイトにて、神社の撤去のための署名運動が起き、22日現在で約700人が参加している。ネット上では、悲劇の歴史も後世に教訓として残さなければならず保存しなければならないという主張や、神社は単純な施設ではなく、日本の精神的な意味が込められており、歴史の清算と一緒に撤去しなければならないという主張が対立している。専門家の意見も分かれていて、民族問題研究所事務局長は、「小鹿島内の神社は、すでに本来の機能を失った。日帝侵略の痕跡の教材として保存する価値はある」と述べた。一方、檀国大学史学科の教授は、「神社は刑務所などの他の植民地時代施設とは違うので、多く税金を投入してまで保存するのは間違っている」と指摘している。